東京大学宗教学年報 XXXIX（2022 年）153-181 頁

日本人無宗教論の系譜

藤原聖子* 稲村めぐみ** 木村悠之介*** 坪井俊樹**** 和田理恵*****

序

「日本人」の多くは「無宗教」なのかどうかは広く関心を呼ぶテーマであり，活発な議論がなされてきた。しかし，「日本人は無宗教である」という説は歴史上いつ始まったのか，最初にそう言ったのはどこの誰なのかについては意外なほど聞かない。これに関しては研究が未だ及んでいないのではないか。

たとえば星野靖二は「日本文化論の中の宗教／無宗教」において，日本人無宗教論の系譜を井上円了の 1888（明治 21）年の論文「無宗教も亦一種の宗教なるを論ず」『令知会雑誌』（47 号）から説き起こしているが(1)，これは当時の日本の上流階級が無宗教を自認しているという内容であり，日本人全体が無宗教であるという論ではない。しかも，同論文の中で，円了の次に出されている日本人無宗教論の事例は山折哲雄『近代日本人の宗教意識』（1996 年）と阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』（1996 年）であり，一気に 100 年以上飛んでいる。その間の時代については，島薗進の「日本社会におけるナショナリズムの動向を反映する形で，特に 1970 年代以降の日本文化論の中で「宗教」の占める位置が大きくなった［そのために日本人無宗教論が台頭した］」(2)という指摘が引用されているのみである。この島薗の指摘は，逆説的にも「宗教」が注目されるようになったために日本人無宗教論が出現したということを示唆しており，それ自体は興味深い。だが，1970 年代以前には日本人無宗教論はまったくなかったのだろうか。幕末から明治期にかけての日本人無宗教論に触れた研究もいくつか存在はするのだが（後述），相互の参照や通時的な把握がなされてきたとは言いがたい状況にある。

このように，日本人論無宗教論の発端とその後の流れという問題は，基礎的な問いでありながら放置されているのではないかと気づいたため，2020 年度の学部・院共同「宗教学演習（無宗教の宗教学）」において，授業の一環として調査を行った。コロナ禍により図書館利用も制限されていたため，学外からでもアクセスできる主要新聞のデータベースを基本資料として用い，さらに可能な限り文献も当たった。「無宗教」というワード検索でどのくらいヒットするかという量の面と，どのような意味で「日本人は無宗教だ」と言われているのかという内容・コンテキスト理解＝質の面の両方から分析を試みた。この研究ノートでは

---

* 東京大学大学院教授
** 東京大学大学院博士課程
*** 東京大学大学院博士課程
**** 東京大学大学院修士課程
***** 東京大学大学院修士課程
研究協力者（東京大学文学部生） 五十川望，小村大樹，豊田浚也，野田正英，藤浪葉子，守尾祐亮

その結果を報告する。

1. 資料と方法

1-1　新聞データベースを用いた「無宗教」記事分類

『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』（その前身となる別名称の新聞を含む。また以下，朝日，毎日，読売と表記する）について，創刊号から 2020 年までの記事で「無宗教」に関するものを網羅的にピックアップし，分類した（分類表と分担の詳細は付録を参照）。

〇分類項目
A　無宗教論（または宗教論）が主題かどうか
B　「無宗教」という語が使われているかどうか
C　「日本人は無宗教だ」論の特徴
1. 特定の「宗教」のモデルをもとに日本人は無宗教だとしているかどうか
2. 日本人は無宗教だと言っている人は誰か
3. 無宗教である日本人は誰か（どの範囲か）
4.「無宗教な日本人」を変えようとしているかどうか
5. 無宗教になった原因をどうとらえているか
6.「外国で「私は無宗教だ」と言うのはよくない」という論があるかどうか
D　「日本人は宗教的だ」論の特徴
1. C への反論として論じているかどうか
2. 宗教的である日本人は誰か（どの範囲か）
3.「宗教的な日本人」を変えようとしているかどうか
4. 宗教的になった原因をどうとらえているか
E　「外国人は無宗教的だ」と日本人と比較しながら論じているかどうか

1-2　関連文献調査

新聞情報が少ない戦前については，雑誌，書籍も利用し当時の日本人無宗教論の特性をより的確にとらえるよう試みるとともに，これまで散発的に存在してきた先行研究の統合的な把握にも務めた。戦後についても，調査者それぞれの関心に応じて分担記事と同時代の関連文献や他紙にもあたった。

2. 主要な成果

2-1　最初に「日本人は無宗教だ」と言ったのは誰か

朝日は 1879（明治 12）年，毎日は 1872（明治 5）年，読売は 1874（明治 7）年の創刊だが，このうち，最も早く日本人の無宗教性に言及している記事は，読売の 1899（明治 32）年の「外人の眼に映ずる日本」という連載である。40 名ほどのお雇い外国人や宣教師の執筆者（インタヴュイー）の内，宗教に言及しているのは 4 名で，ミシェル・ルヴォン（ボアソナードの弟子，法学教授），フランソワ・リギョール（天主教＝カトリックの宣教師），フ

ォン・ケーベル（帝大哲学教授，東京音楽学校講師），エミリー・ソフィア・パットン（東京音楽学校で指導）であった。このうち，「無宗教」という言葉を使っているのはケーベルで，日本は「全く無宗教」であるということを批判的に論じている。他の 3 人も，「無宗教」という言葉は使わないものの，日本における「宗教の影響の少なさ」（ルヴォン）や，キリスト教受容の困難さを論じている。

新聞を離れれば，これより早い日本人無宗教論も存在する。上記の連載と同じ欧米からの来日者による観察としては，すでに幕末の開国時において，日本人が religion に無関心（indifferent）であり，特に上流階級は無神論者（atheist）だ，と述べたものが複数存在し，渡辺浩の研究で紹介されている(3)。

日本語史料における「無宗教」の用例としては，福地桜痴が 1883（明治 16）年出版の『宗教論』において，当時の日本の上流階級（学識者，教育を受けた者）に「無宗教」が広がっていると論じたことに，羽賀祥二や礫川全次が言及している(4)。さらに早い問題提起としては，福地と同じく岩倉使節団の一人だった久米邦武が，1871（明治 4）年に使節団がアメリカに向かう船中で「無宗教」の問題が論じられたと 1908 年の雑誌論文で回想している(5)。

久米によれば，「西洋人に逢へば何宗かといふ事を問れる，その時どう返答をするか」が議論になり，「仏教は困る，全体西洋は宗教などを信ずるけれど，我々はそんなことは是まで信じない」，「儒教は宗教でない」，さらに神道は「世界が宗教とは認めない」から，答えられないとみな途方に暮れたという。

> こんな議論で神儒仏共にどれと言ふ事も出来ないから，寧そ宗教は無いと言はうといつたところが，……西洋で無宗教な人間はどう映ると思ふか，……もし其虎狼のやうに思はれる無宗教の人間と聞たなら，どんな事をするか判らぬと云ふ言葉になるから，無宗教はいけない，段々斯う云ふ話になつて皆困つた。(6)

このエピソードには，日本人無宗教論の系譜という観点から注目すべきことが二つある。第一に，「宗教」の語が日本語に定着する前から日本人無宗教論が存在したということ。通説では，religion の訳語である「宗教」が一般的な語として日本社会に定着するのは 1880 年代である(7)。久米個人に関していえばこの船中では「教法」「教規」の語を用いており，アメリカ到着後に命じられたことが判明しているのは「教門」の取り調べだった。「宗教」の語を選ぶようになるのは『米欧回覧実記』（1878 年刊行）の推敲時である(8)。他方，最初に「宗教」の語が使われたのは外交の場であり，岩倉使節団の発遣に伴うやりとりのなかでも「宗教」の語が出てくるほか，上記の船中での議論にも加わっていた田中不二麿の場合は，「宗教」の取り調べを命じられた文書が残っている(9)。よって，1871 年のこの使節団の会話に「宗教」の語が入っていた可能性も排除できない。いずれにせよ，この会話の時点で religion にあたる概念が話者の間で既に共有されていたことは間違いない。何を論じているのかについて共通理解があったということだ。

第二に，「外国では自分は「無宗教だ」と言うと誤解される，人間性を疑われるかもしれない」といった，現在もしばしば耳にする説の起源はきわめて早く，少なくとも岩倉使節団の時代まで遡れるということ。西洋社会・文化との本格的な接触が始まるやいなや発生した

ことになる。

引用中の「全体西洋は宗教などを信ずるけれど，我々はそんなことは是まで信じない」の「我々」が日本人全体なのか，使節団を指すのかは不明だが，「西洋」という単位と対比していることから，「日本人」を意味しているととることに無理はない(10)。このように，西洋と日本を頭の中で突き合わせ，対比することから日本人無宗教論は誕生した。より正確に言えば，西洋のキリスト教の対応物を日本国内に探す作業の中で，「宗教」とその裏返しの「無宗教」という概念そのものが徐々に形成されていったことがこのエピソードからわかる。

以上から，日本人無宗教論と呼びうる議論は，本研究で確認した限りでは開国時の来日者による観察に端を発し，1871 年の岩倉使節団において，「日本人」を自認する複数の当事者が認識を共有するに至ったといえる。そのうえで，「無宗教」の語の最初の確実な使用は 1883 年の福地桜痴と考えられる。

2-2　その後どうなったか

では，19 世紀から現在まで，日本人無宗教論はどのように継承され，また変化したか。これについては新聞記事を主な資料とし，量と質の両面から歴史的推移を調べた。

A　量的に見て

まず記事を前述の項目に従い分類し，集計した。記事の総数は 1100 点に上ったが，その集計をもとにどの年代に「無宗教」記事が多いかといった比較を行うのは困難であることがわかった。主な理由は，全文検索が可能な期間と不可能な期間があること，そして調査者によって判断に差が生じたことである。前者については，朝日と読売では全文検索は 1986 年以降，毎日では 1987 年以降の記事に限定されており，それまでは見出し検索かキーワード検索（新聞社が各記事に後から付したいくつかのキーワードのみ検索できるというシステム）となっている。このため，1985 年までの新聞記事に日本人無宗教論がどの程度あったかについては，全ての記事を一文一文読まなければ，1986 年以降と同じ精度で数を出すことはできない。今回はデータベースを用いて可能な範囲に作業に限定したため，この点において限界が生じた。さらに，毎日・朝日とともに戦前の有力紙（東京五大紙）だった『報知新聞』『国民新聞』『時事新報』についてはデータベースが存在しない点にも注意したい。

調査者による判断の差という後者の問題は共同研究には付きものだが，収集した記事の分類については，各担当者の判断を藤原が確認し統一を試みた。しかしそれにも限界があり，担当者の予備知識によって読み込み度が変わる項目について特にバラつきが出た。これについては，各記事を複数名で担当し，すり合わせの作業を丁寧に行うしか改善策はないようであり，今後の課題である。分類に入る以前の，記事の取捨選択の判断については，「無宗教」の語が入った記事は全て拾うことにより(11)，全文記事検索が可能な年代については判断の揺らぎを抑えるよう試みた。

このような方法上の困難は生じたものの，ある程度の確かさをもって言えることも見いだせたため，以下にまとめる。

①「無宗教」の語を使い，日本人の無宗教性を論じている記事の数は，日本人論・日本文化

論が流行りだす 1970 年前後ではそれほど変化はなく，明らかに増加していると言えるのは 1990 年代以降である。

三紙の合計では，「日本人は無宗教だ」または「日本人は宗教的だ」が主題である記事の数は，1890s=5+α(12)，1900s=2+α，1910s=4+α，1920s=3+α，1930s=9+α，1940s=4，1950s=9，1960s=15，1970s=8，1980s=9 である。50 年代や 60 年代に比べて 70 年代の方が少なく，80 年代もほぼ同数である。前述のように，1985 年以降は全文検索に変わるため，より多くの記事を拾える可能性はあるのだが，数は増えなかった。それに対して，1990 年以降は，1990s=30，2000s=14，2010～2020=43 と大幅に増加している。

さらに，「日本人は無宗教だ」または「日本人は宗教的だ」に言及はあるが，主題ではない記事についても同様のことが言え，1970 年代前後よりも 1990 年代前後の方が増加の割合が大きい。1910s=1，1920s=2，1930s=4，1940s=2，1950s=4，1960s=1，1970s=6，1980s=10，1990s=35，2000s=37，2010～2020=84 となっている。

新聞の記事の総数自体が徐々に増加し，その影響で「無宗教論」記事も増えた（つまり 1 日分の新聞の中での割合としてはそれほど変わらない）という可能性もあるが，読み手の側からすれば，「無宗教論」記事に接しやすくなったとは言えるだろう。単純に「無宗教」の語でヒットする記事の数の変化を調べると，三紙合計で，「無宗教」の語が使われている記事の数は，1890s=3+α，1900s=2+α，1910s=7，1920s=3+α，1930s=10，1940s=3，1950s=13，1960s=15，1970s=17，1980s=88，1990s=444，2000s=97，2010～2020=213 となり，やはり 1970 年代前後よりも 1990 年代前後での増加傾向が顕著である。

②日本人は無宗教だが，実際にはキリスト教とは違うタイプの宗教を信奉したり実践したりしている，という論調は 1990 年代以降増えるが，1990 年代に流行した梅原猛的アニミズム説は少ない。

「日本人は無宗教だ」と論じる記事の多くは，無宗教だという指摘で終わっており，実際にはキリスト教とは違うタイプの宗教があるという説を展開しているものは，全体としては少ない。そのような説の典型には，梅原猛が『〈森の思想〉が人類を救う』（1991 年）で展開したアニミズム（自然崇拝）説と，阿満利麿（1996 年）の自然宗教（自然崇拝ではなく，自然発生的な宗教の意。民間信仰・習俗などを指す）説がある。

アニミズム（自然崇拝）説の方は，1970s=1，1990s=3，2000s=6，2010～2020=12 であり，この説の知名度に比して少なかった。そこで，「無宗教」を外し，「アニミズム」の語のみを検索してみたところ，どの紙も数百の記事がヒットし，さらに「日本には古来アニミズムの思想がある」という日本文化論的な論調は 1990 年代から増えていることが確認できた。

阿満説に準じるものは，1950s=2，1960s=1，1970s=2，1980s=3，1990s=22，2000s=15，2010～2020=13 であり，阿満（1996 年）の影響があると言えそうである。

他方，「日本人は自分を無宗教だと思っているが，実は会社教という宗教がある」といったパターンの日本人論は少なく，1930s=1，1950s=1，1990s=3，2000s=1，2010～2020=1 という結果だった。

③無宗教である日本人の属性として階級に言及する記事の割合は戦後減少し，それに対し

て，「日本人」をひとまとめにして，その無宗教性を語る傾向は 1980 年代以降に強まっている。

前述の福地桜痴のように，無宗教なのは日本人全体ではなく，知識人層だと論じる記事は，その時代の記事総数に対する割合では戦前の方が多い。日本人論が流行り，一億総中流意識が一般化するとされる 1980 年代以降は，日本人全体について無宗教であるとする記事が増えている。すなわち，日本人全体について「無宗教である」としている記事は，1890s=3+α，1900s=1，1910s=6，1920s=2+α，1930s=6+α，1950s=5，1960s=8，1970s=6，1980s=15，1990s=50，2000s=41，2010～2020=48 となった。それに対して，日本人の中でも知識人や上流階級に限って無宗教であるとしている記事は，1890s=1，1900s=2+α，1920s=1，1930s=3，1960s=2，1990s=7 である。民衆や下層階級が無宗教であるとしている記事は，1920s=2，1940s=1，1950s=2，1960s=3，2010～2020=1 である。年齢やジェンダーについては特徴的な傾向が見られなかった。

④「無宗教である日本人」について，ただそういうものだとして済ませるのではなく，「宗教的になれ」と主張している記事は割合として戦前に多い。

「宗教的になるべきだ」と主張する記事の内，宗教家に何らかのアクションを促しているものは，その年代の記事の総数に対する割合では，戦前において顕著に多い。1890s=3+α，1900s=2，1910s=3，1920s=2+α，1930s=8+α，1940s=1，1950s=3，1960s=7，1990s=2，2000s=4，2010～2020=15 となっている。1960 年代の 7 点の記事の多くは，この時話題になった宗教教育を促す論調である。続く 1970 年代には政教分離問題が注目を集めるが，この時期からしばらく，宗教家に働きかける記事はなくなる。2010～2020 年に再び増えているが，これらは，臨床宗教師や社会貢献に従事する宗教家を励ます論調のため，国民教化を宗教家に求める戦前とはトーンがかなり異なる。

B　質的に見て

量的分析から，日本人無宗教論は，日本人論・日本文化論が流行したとされる 1970 年代以前からあったこと，決して数が多いとは言えないが，岩倉使節団の時代からどの年代にも新聞紙上に常に存在してきたことがわかった。それでは，それら初期の日本人無宗教論はどのような内容だったのだろうか。現在の日本人無宗教論と同じなのか違っていたのか。これについては記事の本文を読み，年代ごとの特徴の把握を試みた。結果として，日本人無宗教論の内容は，時代とともに変化し続けたことがわかった。

1970 年代以前の記事の多くも，次の星野による日本人論・日本文化論の定義を適用すると，日本人論的な日本人無宗教論だったと言える。西洋と比較し，日本の特殊性を論じるという文脈で日本人の（無）宗教性を論じているからである。

ここでいう日本文化論とは，総体としての日本文化の特徴を検討し，示そうとするところの一群の著述物であり，あるいは日本人論とも呼ばれる。これらについては，既に多くの研究があり，概して「普遍的な外国文明」対「特殊な日本文化」という構図が採用されていることが指摘されている。その主題として，言語や社会構造に加えて精神文化論も多

く取り上げられており，その一環として「日本の宗教」が論じられることになる。(13)

しかしその内容は現在とは異なるものだった。表面的な類似点は多く，一見して同じフレーズが反復されているような印象も受けるのだが，目的やコンテキストが違っていたのである。以下に年代ごとの特徴を概観する。

①明治期の日本人無宗教論の特徴

前述の岩倉使節団の無宗教論議の回想の中で，久米は続けて，当時は「宗教」を「冷笑」していたが，「十四，五年の間」に必要性を認めるようになったと述べている。福地の『宗教論』も，欧米は宗教が根幹にあるので文明が栄えているが，日本は宗教を教育から排除しているので，教育を受ける上流階級ほど無宗教になり，それは問題であるという論調である。宗教を教育から排除しているので学生に風紀の乱れがあるともしている。

これらの例に現れているように，明治期の日本人無宗教論は，欧米に追い付き追い越すために，日本に何かが「欠けているか」を突き止める，政策決定のための議論だった。1970 年代以降の日本人論・日本文化論は，ナショナル・アイデンティティ論（「日本人らしさとは何か」論）であり，その文脈での日本人無宗教論である。それに対して，明治期は，言語表現としては同じ「西洋人は宗教を信じ，日本人は無宗教だ」論であっても，内容や目的が違ったのである。

ここに見られる，日本人の無宗教性は，何か重要なものが日本人には欠けていることの指標であるとする論を「欠落論」と呼んでみよう。当時は，「文明社会」や「人間」の理想像や到達目標がはっきりしており，それに到るには宗教が必要かどうかを議論していた。福地のように，必要だとする人もいれば，不要だとする合理主義者もいた。無宗教なのは問題だとする否定的欠落論と，無宗教だから日本人は文明化に適しているとする肯定的欠落論が存在したのである。前述の読売の 1899（明治 32）年の連載で発言している外国人たちは，日本人には宗教がないから道徳もない，日本の仏教は宗教足りえていないという否定的欠落論だった。

たとえばケーベルは

> 私の見るところでは日本に真正の宗教はないと思ふ，仏教は印度にあるが日本にはないでしやう。なぜなれば変化したものは宗教でないからです。……だから宗教をして国民の品行を繋がふと思ふても到底出来ない相談である。まして其を以って道徳心を支配しやふと云ふのも困難である。……現に大学々生の中などでも信仰を有して居るものは全くない。これ日本が全く無宗教なる第一の証據である。（読売　1899.4.11「外人の眼に映ずる日本」40 フヨン・ケーベル博士　独逸人）

と語った。

朝日からも例を出せば，1904（明治 37）年の記事で，ロシアの新聞『ノーヲエ・ウレミヤ（*Новое время*）』が日本人について，「偶像」を「迷信」する民衆は正教に導きうるが，「教育ある階級」には「無神論の思想」が牢固に存在していると論じたと報道している。そ

の例として伊藤博文が「宗教は国民的生活に向って何等の必要あるを見ず。基督教も仏教も単に是, 軽信盲目の信仰のみ。科学は迷信に勝る」(朝日　1904.6.26「時事雑俎　ノーヲエ, ウレミヤの日本伝道論」）と述べていると記されている。

日本には宗教がないから道徳もないという評価には，読者や記者が反論を試みている記事もある。一例を挙げれば，読売の 1908 年のコラムだが，救世軍の創始者ブース大将が，ベルリンでの講演において，イギリスでも大陸でも「宗教の信念」が最近著しく「衰退」していることを嘆き，さらに「日本人の無宗教なるに仰天したりと叫びたり」ということがあったと紹介し，それに対して記者は次のように遺憾を表している。

> 氏の遠征後救世軍が如何に盛衰するやは我輩の関する所に非ず。但し氏が日本人を無宗教なりと見たるは基督教信者の少数なるを意味したるものか，若も然らず何等徳義上の信念なしとの意味ならば我輩は氏の観察の今だ精逸せざる所あるを惜み候。（読売 1908.2.29「編集室より」）

②大正～昭和初期の日本人無宗教論の特徴

大正に入っても日本人無宗教論は続くが，論調に変化が見られる。明治期には，宗教は肯定派にとっても否定派にとっても，文明化や進歩の指標だった。無宗教だから道徳がなく野蛮であるとみなされるか，反対に，宗教は科学と理性に基づく文明化を阻害するので不要であるとされるかだった。それに対して，大正期の日本人無宗教論は，相変わらず日本人には重要なことが欠けているのではないかという「欠落論」だが，戦争を経験することを通して，焦点が国家統合・国力増強のためには宗教はある方がよいのかどうかに移っていった。国家統合・国力増強の対極の状態は，迷信や野蛮というよりも「社会の荒廃」といった表現で表されるようになる。

より正確には，明治期にも宗教が国家統合に使われなかったわけではないが，そこで用いられたのは明治政府が宗教とは別扱いにした神社・皇室祭祀だった。いわゆる神社（神道）非宗教説により，日本人全員に天皇・皇祖神を崇拝させ国家を統合しようという戦略だった。しかし明治末期以降は，神道儀礼だけではモラルの低下による社会の荒廃を防げないという認識が強まり，宗教は国家統合・国力増強に必要なのではないか，教育に取り入れるべきではないかという議論が起こった。

国家による宗教利用として後に批判を受ける三教会同，さらに民間における帰一協会の設立は 1912（明治 45）年だが，これを受けて読売は 1913（大正 2）年の社説で，「精神上の立憲運動」と題し，次のように論じている。憲法が「信仰自由制の精神」に立っているのに，地方の学校ではいまだにキリスト教徒の生徒が差別されたり，教員の中には教壇から「無宗教主義を無上命法の如くに標榜し強迫する」者がいたり，これは「現今の悪弊」であるという。

> 誰いふとなく国教非国教の区画線が神仏教と基教の間に画せられて，動（やや）もすれば学童間に不忠よばはりの行はれ，小なる宗教戦や宗教迫害の断えず所在の学校に繰り返されつつある事なり……既に該訓令［宗教教育を禁止した明治 32 年の文部省の訓令］

が然かく悪用せられて，或いは一宗一派の保護策に利用せられ，或いは無宗教主義の鼓吹に用いられつつある以上は，児童の脳裏に刻まるる偏執の件，及児童の宗教心の衰退は，必然の結果として承認せざるを得ざる可（べ）し，而してそが将来如何なる国民生活上の影響となって現はるるかと言ふに，一方に於いて大なる包括教の現出を妨げ，他方に於いて内的充実なき国民性の貧弱といふ結果を生ずること請け合ひなり，果たして斯くの如くんば，何ほど各教帰一の運動行われ，何ほど思想統一問題絶叫せらるるとも，統一は愚か分離と混沌と反目と懐疑と不安とのみを現出すべく……（読売　1913.11.20　「論議精神上の立憲運動」）

学校教育において宗教を否定したりキリスト教を排除したりしてはいけないというのは戦後の憲法下でもそうだが，この時代ならではの特徴として，諸宗教の共存に留まらない，すべてを包括する宗教（エキュメニズム）の出現が期待されていたことが窺われる。そして，宗教を軽視するために国民が精神的に貧弱になったと憂いている。

さらには第一次大戦においてドイツが敗戦したことは，日本の知識人層に大きな衝撃を与えた。たとえば大谷大学教授の仏教学者，山辺習学は，1919（大正 8）年に朝日に「欧米より帰りて」というエッセーを寄稿している。山辺は，それまで日本人が「欧米の凡てを買いかぶりすぎた」ことに反省を促し，第一次大戦を期に，日本の「国民のもてる真の天地」に帰らなければならないと説いている。フランスもドイツも宗教を軽視した帰結が現在の惨状だというのである。

久しく偏智主義と，物質的快楽主義に国民の心霊を荒らした仏蘭西は，今回の大国難によりて，真実に彼女のもてる領地に立ち返った。それは即ち羅馬教の復活である。各教会には堂々たる大学教授も敬虔の頭をうなだれて，雛僧の説教にも，熱心に耳傾けつつある。独逸は戦前に於いて，急速なる的運の隆盛を計って，各大学は殆ど全く無神論者の教授をもって満たされ，そして男女関係の如きも，一般に道徳的に取扱はず，単に科学的に取扱った為めに，伯林の如きは，世界無比に醜態を外に洩らしたと称せられた。今日まで日本の文教の中心たる各大学は殆ど独逸流の学者に満たされた。その結果は今日の荒れ果た日本の心霊界を現出するに至ったのである。千三百年以前，我聖徳太子は，憲法十七条を制定して，「篤く三宝を敬え」と訓令し，身親ら衆とともにこれを実践せられた。今や我日本は，此偉大なる日本文化の創始者に帰命せねばならぬ。かくすることによりてのみ，我国民は帰るべきところへ帰り，進むべき道に進むであろう。（朝日　1919.11.05 山辺習学「欧米より帰りて」）

他方，昭和に入ると，無宗教ではなく「反宗教運動」という言葉が現れる。これは貧富差拡大などの社会問題が深刻化する中で台頭した社会主義による，宗教批判の運動を指していた。反宗教運動家は，宗教は無産大衆にとって「害」，「阿片毒」であり，その伝染を防がなくてはならないと主張した（読売，1931.3.11 高木正造「反宗教の立場から（二）」）。

このような社会主義が実際にどの程度労働者階級に影響を与えているのか，1937 年に東京府王子区が調査を行っている。これについて朝日は，「最も注目されるのは要［生活］保

護者四千四世帯の中，無宗教者は僅かに三世帯で，貧困者が如何に日常生活を宗教に訴え縋らうとしているかが数字に示されている」（朝日「無宗教は三世帯　王子要保護者調べ」1937.4.15）と報じている。

この数字を額面通り受け取ってよいかは不明だが，この時期の新聞に現れるのは，無宗教化しているのは貧困層よりも若者または現代人全体であり，その結果として不良化や社会の殺伐化といった弊害が生じているという論である。もはや学校の宗教教育でも足りず，親が宗教を持つことを求める記事もある。司法省嘱託少年保護司の 1927（昭和 2）年の寄稿「不良児は無信仰の家庭から　母親は宗教を持て」は，宗教的信仰のない母・保育者に育てられた子どもには不良が多いことを指摘し，親に宗教，特に仏教の信仰をもつように呼びかけている（読売　1927.6.14　吉田春「不良児は無信仰の家庭から　母親は宗教を持て」）。

もう一例を挙げれば，1931（昭和 6）年に，東京家政学院の創立者である大江壽美子が読売に寄稿したエッセーは，日本人が宗教的に堕落したのは明治以降であるとする論を展開している。明治期の新聞記事には，日本の宗教，とくに仏教は明治以前から堕落していたという論が多かったが，ここでは近代化以前は日本人は信心深かったという説に変わっている。

> 私は明治維新以来の日本はあまりに物質文明に眩惑されて，宗教的に堕落したと思います。徳川時代迄は民家の家々にも必ず神棚や佛壇があって，御飯をいただく前に先づ佛壇に供へていたりした。……それが明治以来宗教を軽視したためでもありませう。無宗教を誇るものさえ生じて，ただ人前さへ繕って，法律にさへ触れねば少しも恥づるところはないと考へる人が多くなりました。そのために人を尊重する心や高く仰ぐ敬虔の念は地を排（はら）ってなくなりました。ただ権利と義務だけでものを計るようになり，人心は荒んで殺伐な闘争も怪しまずなりました。
>
> 今日はひたすらに偏理主義が蔓り理屈ぽくなり，観念の哲学がこみ入った思想を構成して実際生活とは甚だ縁遠いものとなり，その結果は情操生活がなくなり，右申したやうな宗教を経験すらしないで頭からこれを一蹴する者が多いのです。しかし，私はこの宗教的経験は学校教育にも十分授けられねばならんと考えています。唯学校ではこの宗教教育は種々困難がある。……それで私は此大切な宗教的訓育は家庭で行ふべきものと思ひます。（読売　1931.3.15　大江壽美子「三つの当為」）

1940 年代以降は宗教団体法の制定など，宗教への国家の統制が強まったためか，新聞紙上の日本人無宗教論も鳴りを潜めた。

③戦後直後～1950 年代の日本人無宗教論の特徴

戦争が終わると間もなく，新聞紙上に日本人無宗教論が再び現れるが，それもまた欠落論であるものの，論調は大きく変化した。第一次大戦直後は，無宗教化したドイツの敗北が話題になったと述べたが，第二次大戦後は，宗教心があると人間は平和を志向するのかどうかという議論が起きた。つまり，日本人は宗教を信じれば戦争に勝てるという戦前の議論に対し，宗教を信じれば平和になるという議論が出てきたのである。

敗戦１年後の衆議院議会について，議長が「民主的かつ文化的国家を再建し，世界恒久平和に寄与すべく全国民をあげて奮起すべき」旨を述べたことを受けて，朝日の記者は次のように述べている。

……これからの一年こそが，歴史の最も重大な年となるのである。美しい夢の様なことを述べて手をたたいているときではない。

前から問題となっていた「宗教的情操教育に関する決議案」が皮肉にも，この日上程可決された。提案者（進歩［党］）はしきりに「戦争は罪悪である」と説き，宗教的自我の否定，それによる隣人愛，同胞愛，これにつらなる人類が，しかして世界の恒久平和を論理づける。

だが，これに対する細迫氏（無［所属］）の質問の如く「宗教的情操教育とは具体的に一体何か」といふことは一向説明されない。世界の隅々まで宗教は存在したし，今日も存在する，しかし戦争は起こった，またその可能性が存在することも否定されない。

四海平等は具体的現実的でなければならない。内村鑑三氏は日露戦争に反対した。太平洋戦争に反対した宗教家は果して幾人あったか。（朝日　1946.8.16「宗教家の信念　細迫氏突込む　議会記者席」）

宗教心があれば世界平和が実現すると主張する議員に対して，この記者は，それは宗教の美化だと批判している。その翌年にも，日本人は無宗教だから，戦争で残虐な行為を行えたのだという意見に対して，現実の宗教家にはその力はないとする社説が掲載されている。

……日本人の八割余を信徒とする仏教の現状には，ぬけがらのような無気力さをおぼえぬものはあるまい。……戦時中に行われた残虐行為や，敗戦後の世道人心の廃たいが日本人の宗教心欠如に原因しているといわれ，教育に宗教的情操をみちびき入れる必要が唱えられている。しかし，それを唱える人の中にさえ，今日の僧侶にその重責を期待する人のないことは，仏教界が反省しなければならない。（朝日　1947.1.27「既成宗教の沈滞と邪教発生 社説」）

他方，投稿欄には，宗教のない日本人は心が荒んでおり犯罪が広がっていると懸念するものがある。仏教学者長井真琴の投稿であり，若者に宗教意識調査を行ったところ，宗教を持たない者，宗教に関心がない者が多数派だったという結果が英字紙 *Nippon Times* に掲載されたことを受けてのものである。

一月中旬の日本・タイムスには産婆石川の鬼畜行為［もらい子殺し事件］と学生の無信仰について述べた記事があった。また下旬の同紙にも帝銀支店の毒殺事件がかかげられていた。外字新聞であるだけによけいはずかしさにたえない気持がする。終戦後の，あさましい限りの日本の世相だけを見聞きしている外人から“日本はやはり半野蛮国だ”と烙印をおされても，すこしも抗弁の余地はないであろう。……いったい原因は何であろうか。

政治も教育も信仰をぬきにした形式ばかりで，外をあかるくする文明はやや開けたが，

内を明るくする文化は衰え，信仰のない国民となってしまった。無信仰の国民は富めばおごり，貧しては盗む，勝てばほこり敗れてはやけとなり，敗れて窮すれば今日のような世相をえがくのである。新日本を興す唯一つの道は宗教的信念をたかめることにあると信ずる。（朝日　1948.2.9「声欄　無信仰の国民」）

日本の近代化は物質面のみであり，宗教を軽視したために精神面は野蛮であるというのは戦前にも見られた議論である。だが，ほんの数年前まで神国思想という宗教を信じていたはずの自国民に対して，ずっと無宗教，今も無宗教，という評価が与えられているところはこの時代の特徴と言えよう。

それに対して，1950 年代に入ると一転して，信仰に熱心な人々の様子が報道されるようになる。創価学会や立正佼成会を筆頭とする新宗教教団が勢力を伸ばした他，伝統仏教においても法話会を開く寺院が増え，大学の仏教青年会の活動も活発化した。

無宗教なのか信心深いのか，この複雑な状況を「日本の宗教の特殊性」とする視点から，1954（昭和 29）年 12 月に宗教学者 5 名と三笠宮が行った座談会「日本人の宗教心を切る」が読売に収録されている。なぜこの時に座談会が行われたのかについては記事中に説明がないが，背景としては，その半年前に三笠宮を初代会長とする日本オリエント学会が創設されたこと，また国際宗教学宗教史学会（IAHR）の国際会議日本招致活動が始まるなど宗教学会の活動が活発化していたことなどが挙げられる。5 名の内，堀一郎（東北大助教授）以外は，日本人には宗教らしい宗教がないという「欠落論」だった。

司会の仁戸田六三郎（早稲田大学教授）が，家の中に神棚と仏壇の両方がある日本の状況をどう考えるかとふると，菅円吉（立教大学教授）は「日本人が昔からこの重層性を持ちつづけてきているということは，彼らの生活が混とんの連続だからだともいえる。中途半端で不徹底な生活態度なんですよ，それは。」と答える。戸田義雄（国学院大学助教授）も「神仏合体という日本人の習慣はせんじつめれば個人が宗教を自ら選びとるその選択以前の宗教ということになると思う。先ほど堀さんもいわれたように日本の宗教は個人の宗教というよりも家の宗教で，このこともこの点から考えられるのですね。西欧人がキリスト教という一つの宗教を選びとったようなことは，日本人にはできなかったからではないか」と応じる。

さらに仁戸田が「日本人にほんとうの意味の宗教心はあるのか」と尋ねると，菅は，西欧人は「日本人の現実的性格や，罪の観念にかけていることから」，日本人は非宗教的民族だと言いがちだが，「宗教心が全くないというんではなくて，宗教の極めて低いプリミチブな段階のもの，あるいは宗教的なものに対する情熱はあるが，真の意味における宗教心といったものは完全に備えていないということでしょう」と答える。戸田も「日本は灰色宗教圏だと思うんです。宗教的関心が薄いといおうか，宗教心がないんですね。……日本人というものも，結局は俳句的，和歌的世界の人間だと思うんです。日本が灰色宗教圏を脱して真の宗教性をかちとるには，芸術的表現イコール解脱の公式をホゴにしなければならない」と言う。これらに対して堀一郎（東北大学助教授）は，「そう割り切っていえることかな」と，日本人も「実際には宗教心をもっているのです。ヨーロッパ的な神中心の宗教ではなくして人間中心の宗教をね。日本の農村の宗教のあり方を見ていると，神というものは与えられていた

ものではなくて人間の生活の希望的投影として，それぞれの人々によってとらえられているものだと私は思うんです」と反論している。このやりとりに対して，小口偉一（東京大学助教授）は，

こうした問題を考える場合，人間の宗教性とはなにか，ということをまずはっきりさせておかなければならない。かりに，絶対唯一者への帰依を宗教と定義づけるとすれば，すくなくとも日本人は本質的には宗教的民族だと思う。決して非宗教的とはいえない。しかし問題を現在に限って論ずるということになれば，相当に非宗教的だとも言える。大体，民族の宗教心というものは，その国の人間教育いかんにかかっていると思う。現代の日本人に宗教性が欠けているといわれるのも，こうした意味での教育が今まで等閑視されてきたためであり，また封建的政治権力が日本人の純粋な宗教心の発展を阻害してきたためではないか。（読売　1954.12.15「日本人の宗教心を切る」）

というように，宗教心がないのは現代の日本人だと話を変えていくが，各個人が自覚的な信仰を持つ方がよいという論点は菅や戸田と変わらない。そして新宗教の流行については，「生の不安に対する解決者として登場してきた」「現実の問題に真っ向から対決を挑もうとしているその激しい性格が普及速度のエネルギー原になってるんじゃないか」という戸田の発言を受けて，小口も「新興宗教のよいところはどんどんとり入れていってよいと思うんです」と言いつつも，それだけでも不十分だということを言外ににおわせている。

④1960～70 年代の日本人無宗教論の特徴

日本人が無宗教であることを，重要なものが足りないのだと反省を促すこの欠落論に対して，20 世紀後半には，堀のような，それは宗教の種類が違うだけであって欠陥ではないという対抗言説が増えていく。1960 年代にはその変化の兆しが表れている。堀のような民俗学者の間では，日本擁護的な日本特殊性論は珍しくなかったが，ドイツ文学者の竹山道雄がそのようなことを言い出しているのは注目に値する。日本人の宗教は折衷主義であって本当の宗教心はないとか，一神教ではないので倫理を欠き，恥の文化があるだけだとよく言われるが，それは「キリスト教の尺度によってはかっている」からにすぎない，「キリスト教の規準」を日本にあてはめるのは間違いだとして，竹山は次のように論じている。

日本人の生活の中で，さまざまな宗教が共存していてもべつに背理ではない。ただ一つの宗教の論理体系が，すべての分野を支配しているのではなく，それぞれの宗教が同じ聖なるものをめざして，それぞれの分野を受け持っているのである。心身を潔（きよ）めて自然に没入するという面では，神道がその役を果たす。解脱や慈悲を求める面では，仏教が導いてくれる。隣人の愛の教えをきこうとするときには，キリスト教会にゆく。みなおなじ高嶺の月を仰いでいるのである。

こういうことはキリスト教の規準からみれば，じつに奇怪なことであっても，もともとの前提がちがうのである。「宗教的」という言葉が，しばしば「一神の命をきく」ということと同意語に使われていることが多いが，われわれの場合には，絶対者であるところの

嫉（ねた）む一神が，人間に他の神をあがめることを禁じて，自己をはっきりと示顕しているのではない。……キリスト教徒であると否とにかかわらず，すべての精神的に成熟した人間には本然の倫理的要求がある。……一神の命令があって，はじめて倫理が生まれるのではなく，……日本のむかしからの宗教的性格も倫理も，それ自体に根拠をもったものであり，それによって人間をささえてきた。こういうものの力が衰えたのは，現代に共通の現象である。日本では，戦中から戦後に多くの頽廃現象があったので，人々はともするとわれわれが未来をきずく力の欠落者であるように思いたがるが，物質の建設はともかくもなしえた者が，精神の建設はできないということはあるまいと思うのである。（毎日 1962.1.27　竹山道雄「聖なるものへの畏敬　日本人の宗教性」）

最後のところでは，今の日本人には宗教心が「欠けている」という論調になっているが，その欠落を埋めるのは，日本独自の宗教伝統であるとする点は，先に引用した 1950 年代の座談会の論調とは明らかに異なっている。朝鮮戦争特需を経て高度経済成長期に入ったころから，このような意見が特に宗教界に属するわけでもない識者から出されるようになった。

1970 年代は日本人・日本文化論興隆の時代とされている。代表的なものに，中根千恵『タテ社会の人間関係』（1967）や村上誠三郎・公文俊平・村上泰亮『文明としてのイエ社会』（1979）があるが，封建的とされてきた日本の「イエ」社会は実は優れたシステムであり，経済成長のカギだといった説が流行する。「日本人のアイデンティティ」論に，社会・経済的視点が加わったのがこの時代の特徴である。

これを受けて，日本人無宗教論も変化する。日本人の「無宗教」は，何かの欠落ではなく，日本社会を成り立たせているある原理（いわば「日本教」）の別名である，という論が出現し，人気を集めるようになる。それ以前によく見られた，「日本の宗教には（キリスト教的な）罪の観念はなく，代わりにあるのは（ムラ社会的な）恥の観念だ」論のポジティヴ転換である。議論から自己批判性が消えたというわけでは必ずしもないが，積極的に「日本教」の中身を表現するようになった。その代表は山本七平『日本人とユダヤ人』（1970），『「空気」の研究』（1977），さらに 80 年代に入るが，小室直樹との共著『日本教の社会学』（1981）である。日本人の宗教は，神信仰ではなく，空気という同調圧力を規範とする日本教であり，この日本教が先行して存在するため日本人は特定の宗教の信者になれないのだという議論である。

調べた限り，新聞紙上では「日本教」論が展開されるというところまではいかないが，1970 年代の日本人無宗教論は明確にポジティヴ化しており，かつ，仏教伝来以前の信仰や民間信仰を評価するという論調が増える。一例として，1975（昭和 50）年に評論家小林秀雄と今日出海が毎日紙上で行った対談を挙げる。

今　日本にいったい宗教があるのか，ないのか……。
小林　そういうふうな問題の出し方がいかん。……［日本人の宗教は］素朴な宗教的経験のうちから教理が生まれ育っていくという過程がなく，持って生まれた宗教心と外来宗教のドグマとの露骨な対立，その強引な解決というものがまずあった。そこから宗教の歴

史が始まっている。

こういうことは，キリスト教史を書く西洋の学者にはとてもわからぬことだろう。だから，わが国の仏教史の専門書は，露骨な仏教のドグマ史になり，生きた宗教的経験がどこへやら行ってしまうことになる。そういうことを考えると，日本の宗教を言う場合は，とくに，原始的な宗教心，人間の組織のうちに組み込まれた宗教心というものまで下ってみてからものをいう必要が痛感されるわけだ。そこまで下りてみないと，宗教心と宗教的ドグマの間に非常な年月をかけて微妙な調和を達成した日本人の知恵が感得できないだろう。……

宗教とは教理ではなく，祭儀という行動であった。そういう期間は非常に長かった。……その間，宗教は文化の中心部にあったはずだろう。その間の宗教的経験というものは，日本人の本質的意味での文化上の知恵を十分に訓練したと見ていい。外来の宗教的ドグマに出会った時，これを受け取る日本人の気質は基本的には完成していた。ドグマに気質の方を変える力はない。ドグマの方を気質が吸収して己の物と化する。（毎日 1975.10.04「小林秀雄氏・今日出海氏　交友対談　10　日本人の宗教心」）

さらに小林はこの説は宣長や柳田国男に基づいていると述べている。

もう一例として，次にあげる 1976（昭和 51）年秋の彼岸の時期に朝日夕刊一面に掲載されたコラムは，欠落論から始まるが，実は日本人には古来，アニミズムという良い思想があると（この時代は必ずしもアニミズムという語は用いないのだが）論じている。

……このほど発表された米・ギャラップ社の調査によると，世界七十カ国のうちで日本人が「いちばん信仰心が薄い」そうだ。……無信仰の社会はたしかに一つの歯止めを欠いている。だがそれがいちがいに悪いとはいえない。ただ，拘束するものを持たぬ者には，それだけいっそう自立の精神が必要とされる，ということだ。自分の行動には自分が全責任を負わねばならないからである。

それにまた，特定の神を持たぬ日本人は，むかしから自然の一木一草にも造化の妙を見るゆたかな感受性を持っていた。そのいわば汎神論的感覚が，独特のすぐれた文化，芸術を生み出してもきた。

だが，いまこの国には限りなく自堕落な人々がうごめき，感性をはぐくむ自然の緑も破壊しつくされようとしている。此岸はただ汚濁の末世である。（朝日　1976.9.22「此岸にて」）

この時，同じ一面のトップ記事は，水俣病刑事裁判の初公判の報道だった。

このように，日本古来の宗教・民間信仰的な儀礼を主とする伝統は良いものではないかという議論が目立ち始める一方，宗教・無宗教をめぐるこの時期のもう一つの大きな争点は政教分離訴訟や靖国神社法案に関わるものだった。その文脈では，むしろ宗教的祭礼について，公的機関が行う限り政教分離に抵触するという否定的な議論が出ている。たとえば，1971（昭和 46）年の読売に掲載された，58 歳の会社員からの投稿「“無宗教儀礼”を考えるとき神式地鎮祭，起工式もう限界」など，一般読者からもそのような声がある。

⑤1980～90 年代の日本人無宗教論の特徴

1980 年代には,「日本人は実は無宗教ではなく，独自の宗教をもち，それには良いところもある」論が，識者だけでなく一般の若者や外国人の声として載るようになる。たとえば 1988（昭和 63）年のクリスマス・シーズンに，朝日の「声・若者たちはいま」欄にクリスチャンの大学生から次のような投書が掲載されている。

……この時期，決まって日本人の宗教心が取りざたされる。私の教会でも，信仰における日本人の無節操に腹を立てる声が聞かれるが，大抵「まったく日本人は無宗教で」ということに落ち着くようである。しかし，確かに多くの日本人は無宗教かもしれないけれど，同時に，きわめて宗教的な国民なのではないかと私は考える。

受験合格とか交通安全とか縁結びとか，いわば現世的御利益をお願いしてばかりいるのは虫のいい話である。しかし，いずれも人の力ではどうしようもないこと，または不確かなことを，人間を超えた存在にゆだねようとしている。それは，自分の限界，自分の弱さを認めることにもなるのではないか。

日本人の優れた技術が，何でも可能にしてしまえると過信しがちな現代，クリスマスやお正月は，そんな日本人を超えた見えない何かを思い出させてくれる良い機会なのかもしれない。（朝日　1988.1.14「国民に宗教を思わせる季節」）

毎日は 1983（昭和 58）年にアメリカの人類学者，ロバート・スミスにインタヴューを行い,「日本人の宗教意識」という特集を組んでいる。「不思議といえば，日本人の宗教意識ほど不思議なものはない」という言葉に続き，

――よく，日本人は宗教に無関心といわれますが……。

［スミス］　日本に関する本を読むとたいていそう書いてありますが，とんでもない間違いです。たとえば，道で会った人に手当たり次第に「宗教に興味はありませんか」と聞いてみる。ほとんどの場合「関心ない」とそっけない返事が返ってくるはずです。しかし，「あなたのご先祖さんのことを聞かせて下さい」と水を向けたら，話は違ってくる。亡くなった人の思い出話やら家系やら，どんどん話がはずむはずです。仏壇やお位はいのない家庭は少ないし，祖先崇拝の強さは，お守りとともに，日本人の宗教意識の大きな特徴ですよ。

――祖先崇拝も宗教？

［スミス］　もちろん立派な宗教です。……日本人というのは，実に宗教的で信心深い民族ですよ。みなさん，それを自覚しておられないだけの話です。（毎日　1983.1.12「日本人の宗教意識」）

ここからさらに 10 年経つと，論調が再び反転し,「日本にはまともな宗教がない」という声が紙上に目立つようになる。それはオウム真理教事件の影響である。オウムに若者たちが入信したのは，既成教団が宗教としての役割を果たしていないからというものである。特に

一般人からの意見が増加している。たとえば，読者投稿で「戦後の教育は，人生をまじめに考えさせることを怠ったようです。すまないことです。また，私のような既成宗教は，「お弔い」から抜け出すことができません」（朝日「オウム真理教 投稿特集（語りあうページ）」1995.7.18）と反省する 60 代の住職の声が掲載されている。30 代会社員による次の投稿「宗教知らずの「私は無宗教」も，日本にはいまだ宗教らしい宗教がないとするものである。また，事件後，「私は無宗教です」が，「私は普通の人間です（危ない者ではありません）」と同義の発言として社会に広がっている様子が伺える。

宗教団体の堕落を批判する声が高まっているが，宗教そのものも指弾される場面が増えてきたようだ。先日もラジオで，「私は無宗教です」と得意げに発言する人がいて，良識ある意見の代表のようにうなずかれていた。私たちの中にはどうやら，「人間の良心と努力によってこそ物事は打開されていくのだ」という強固な信条があるようだ。

時にそれは「ヒューマニズム」と呼ばれるが，しかし，これはひょっとしたら一種の迷信，思い込みに過ぎないのではないか。

自信に満ちて，ひたすら幸福追求をしてきた私たちは，どんなすばらしい世界を造り出したのか。私たちの良心や努力は，それほど信頼するに足るものだったのか。

ヒューマニズムは，一歩間違えれば「人間至上主義」となる危険性を持つ。影の部分を含めた自己点検が実は最も急務ではないか。

しかし，ひるがえって考えるに，良くも悪くも人間が人間を正確に照らし出せるのか。ここに立ち表れてくるものこそ，本来の宗教ではないだろうか。

宗教への批判の多くは的確ではない。神秘体験，超能力，処世訓，精神修養，死後の世界，現世利益をめぐる取引，占い，マジナイ，タタリを恐れての供養……。これらはすべて人間の欲望の従者である。

こんなたぐいをもって私たちは「宗教」と呼び，批判を加えるが，私たちのおメガネにかなう宗教とは一体，どんなものなのか。

問題は宗教ではなく，常に自己を「良し」とする私たちの側にある。私たちは「無宗教」なのではなく，いまだ宗教を知るに至っていないのかもしれない。（朝日　1995.7.18「オウム真理教 投稿特集（語りあうページ）」）

⑥2000～2020 年の日本人無宗教論の特徴

2000 年代の特徴としては，第一に，イスラムと比較して日本人の無宗教性を論じる傾向が挙げられる。言うまでもなく，アメリカ同時多発テロ事件の影響である。たとえば「イスラム過激派」についての連載を，「中東のイスラム諸国を旅行すると，入国カードに自分の宗教を書かなければならない国が多い。日本人で「無宗教」と書き空港で足止めをくらった話もあるほど，宗教には敏感な地域である」という導入で始める記事がある（朝日 2001.9.18「教徒は生涯改宗できず（イスラム過激派四話：その 1）」）。また，ムスリムと無宗教日本人の間の異文化理解を促す論調も見られる。岡山県の高校教師は，

テロ事件をきっかけにラマダンや食事，生活環境などを知る機会が増えた。日本に住む

イスラム教徒もテレビなどに登場し，日常の暮らしぶりを伝えてくれている。皆宗教に深く帰依し，まじめで陽気な人々に見える。彼らからすればキリスト教徒も仏教徒も理解しがたい慣習を持っているに違いない。まして「無宗教」と言われがちな日本人の行動についてはなおさらだろう。理解するにはまず知ること，知るには知りたいという欲求，好奇心が必要だ。不幸な出来事がきっかけなのは残念だが，互いに宗教や文化への理解が進んでいってほしい。（朝日　2001.12.11「異教徒理解に必要な好奇心」）

という声を寄せている。高校生からも

報道から，テロ犯は一般のイスラム教徒ではなく過激派とわかっているのだから，私たちは，テロリストの身勝手から差別や非難を受けるようになってしまったイスラム教徒の声に，耳を傾けなければなりません。

自分たちの誇りある信仰が間違って認識されていく悲しさは，無宗教と呼ばれる多くの日本人には理解しにくく，興味を持ちにくい問題なのかもしれません。だからこそ，日本のメディアは，テロ事件を報道する時間や手間と比例させてイスラム教徒の訴えもとりあげ，無関心ゆえの誤解を正すのに貢献すべきだと思います。（朝日　2002.11.8「イスラムの声，もっと報道を」）

という投書がある。

第二に，無宗教をキーワードとする記事では，小泉首相参拝を受けて，靖国神社とそれに代わる無宗教の追悼施設建設計画に関するものも多く見られる。靖国に代わる無宗教の追悼施設という文脈で「無宗教」という語を使う記事は 1980 年代から存在するが(14)，2000 年代はその議論にさらに日本人無宗教論を絡めたものがある。次の哲学者梅原猛の寄稿である。

思い出すのは昭和五十九年，首相の靖国公式参拝の合憲性を審議するために設けられた藤波孝生官房長官の私的諮問機関「靖国懇」である。その委員の憲法学の権威，芦部信喜氏は首相の靖国参拝が憲法違反であることを敢然と主張し，私もまた以下の二つの点で反対意見を述べた。一，記紀に示される伝統的神道は，味方よりむしろ味方に滅ぼされた敵を手厚く祀（まつ）るが，靖国神道は自国の犠牲者のみを祀り，敵を祀ろうとしない。これは靖国神道が欧米の国家主義に影響された，伝統を大きく逸脱する新しい神道であることによる。二，首相の靖国参拝は日本と中国や韓国などの東アジア諸国との親善関係を阻害し，ひいては日本の国益に重大な損害を与える。……第一の点について，現在私は，靖国神道と深く関係している廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）を仏ばかりか神殺しでもあると考える。廃仏毀釈は仏を否定し，神をほぼ天皇と天皇の御祖先にかぎったが，ただ一つの神として残った天皇も戦後，「人間宣言」によって神の座を降りられた。この仏殺し，神殺しのツケが今，日本人の無宗教，無道徳となって表れているのである。

廃仏毀釈の後，明治政府の仏教を国家神道の統制のもとにおこうとする政策によって，「大教院」なるものがつくられ，その本部が増上寺におかれ，寺の本尊阿弥陀仏は天照大

神などに替えられた。イギリスに留学して西欧諸国の宗教の現状をみてきた島地黙雷は，西欧では政教分離が実現されていると強く主張し，東西本願寺が大教院から離脱した。それでこの制度は崩壊したが，私は，精神的には大教院は少なくとも戦時中まで続いていたと思う。

戦後，鈴木大拙が，「精神」という言葉が国家主義によって汚されているのを嫌って「霊性」という言葉を用い，日本の霊性を目覚めさせるにはこのような国家神道の影響を排除しなければならない，と弟子筋にあたる和辻哲郎などを厳しく批判したのは，島地の主張の線に沿ったものであろう。

私は，首相の靖国参拝はこの「大教院」の亡霊を復活せしめようとするものであると思う。一国の首相はせめて識者の意見に耳を傾け，己の偏見を反省するくらいの理性をもたねばなるまい。（朝日　2004.4.20「理性の復讐招く靖国参拝　梅原猛（反時代的密語）」）

すなわち，明治期の国家神道化が日本人の無宗教化の大きな引き金になったという説である。前述のように，日本には古来，アニミズムという自然共生思想があるという説は，梅原の影響により新聞紙面上で 1990 年代以降増加するが，そのようないわゆる古神道と国家神道を明確に区別する論調も，首相参拝問題を受けて浮上してきたということだ。梅原と比較すれば，その二つを必ずしも区別しない靖国神社山口建史総務部長が，

日本人は多層信仰であり，神社に参拝し，仏壇にも手を合わせてきた。国のために命をささげた方を顕彰して，それが戦争賛美になるだろうか。二度と戦争をしたくない，という気持ちと矛盾しないと思う。新しい施設を造るというが，「無宗教」という名の宗教に国が肩入れするのもおかしなことだ。（朝日　2003.2.10「新・追悼施設で宗教界，なお混迷　国の「肩入れ」に警戒感」）

というように，政教分離は国が「無宗教」という宗教を優遇していることになると論じたという記事もある。

第三に，「日本人は実は無宗教ではなく，独自の宗教をもち，それには良いところもある」論の復活，強化が見られる。たとえば次の例は読売が後援した，大学の連続講義を報道したものだが，いわゆる葬式仏教は無宗教ではなく誇るべき宗教だという論調が現れる。

京都市左京区の法然院貫主，梶田真章師が「日本人の宗教心　仏教と先祖教」をテーマに語った。……批判的に取り上げられることが多い「葬式仏教」だが，「日本の誇るべき宗教。高度経済成長期までは，日本人の宗教心を培うのに大切な役割を果たしてきた」とする。国内に 7 万を超す寺院があると紹介したうえで，「たくさんの寺院が存続できたのは，葬式と法事をしてきたから。寺の基盤を維持するのに，檀家（だんか）との関係を大切にしてきた」と強調した。民俗学者の知見を引用して，葬式仏教を「先祖教」と定義。自分は無宗教と考えている日本人が多いが，「宗教心がないわけではない。先祖をまつれば，先祖が救って下さるという先祖教を，日本人は大切にしてきた」と言う。（読売 2005.7.13「立命館大講義「現代社会と宗教」より　梶田真章・法然院貫主」）

このような議論でもっとも言及が多いのは宗教学者山折哲雄である。山折の記事は 1990 年代から急増し，オウム事件の前も後も日本教論または「日本人の無宗教は伝統宗教・民間信仰」論を展開していたが，2000 年代は山折に依拠した論が増える。

読売はまた，2008 年に日本人の宗教観をテーマとした調査を実施し，日本人は無宗教と言われるが，実際には日本人特有の宗教性があると結論づけている。

「宗教観」をテーマとした読売新聞社の年間連続調査「日本人」からは，日本人の半数は「自分たちの宗教心は薄くない」と考えていることが明らかになった。自然におそれを抱く気持ちもなお強く，日々の暮らしでは「墓参り」「初詣で」などを宗教色を意識せずに受け入れている。「宗教を信じている」という人は 3 割に満たないものの，日本人特有の宗教観は確かに存在しているようだ。（読売　2008.5.30「年間連続調査「日本人」　宗教観　宗教心，静かに息づく」）

具体的には，「宗教を信じている」と回答する人は 26%と少ないとした上で，次のデータが並んでいる。

調査で「自然の中に人間の力を超えた何かを感じることがあるか」と尋ねたところ，56%が「ある」と答え，「ない」は 39%だった。「ある」はすべての年代で 5 割を超え，40 歳代の 60%が最も多かった。「宗教を信じている」人では 70%，「信じていない」人でも 51%が「感じることがある」と答えた。自然をおそれ，敬う気持ちも日本人に共通し，宗教観の形成に影響しているようだ。

宗教に関することで「していること，したこと」を複数回答で聞くと，「盆や彼岸などにお墓参りをする」78%，「正月に初詣でに行く」73%，「しばしば家の仏壇や神棚などに手をあわせる」57%，「子供のお宮参りや七五三のお参りに行く」51%などの順で多かった。「経典や聖書などを折にふれ読む」は 8%，「宗教的な行として，お勤め，ミサ，修行，布教などをする」は 7%となった。宗教的色彩が濃いものは数値が低い傾向は，79 年 7 月以降計 9 回の調査とも共通している。

「墓参り」は「宗教を信じている」と答えた人で 84%，「信じていない」人でも 77%が挙げた。「初詣で」も「信じている」72%，「信じていない」74%で，信仰の有無にかかわらず幅広く行われている。日本人は宗教心が薄いと思うか――では，「そう思う」（45%）と「そうは思わない」（49%）が拮抗（きっこう）した。宗教を信じている人は 3 割弱の少数だが，特定の信仰と宗教心が必ずしも一致しない日本人特有の宗教観を表しているようだ。

「そう思う」という答えを年代別に見ると，20 歳代が最多の 55%で，30 歳代も多数だった。40 歳代以降は「そうは思わない」が上回り，最多は 40 歳代の 54%だった。

「最近，日本人のモラルが低下したのは宗教心が薄いからだ」との意見には「そうは思わない」が 79%と否定的だった。（同上）

そしてこの記事において評を寄せているのも山折である。

◆自然の中，感じる先祖の気配

……宗教を信じていない，と答える人は，これらの行為［墓参り，初詣等］を宗教的だとは思っていないという自己矛盾に陥っている。この背景には，日本が明治以降，キリスト教的な考え方を受け入れてきたことがある。宗教を信じることとは，一神教を信じることなのだ，という価値判断をしてしまってきている。

この尺度は改める必要があるのではないか。キリスト教徒は神の前で，日本人は先祖の気配を感じてその前で身を慎んで生活してきた。どちらが良く，どちらが悪い，ということではなく二つのパターンがあるということだ。

そう考えると，今回の調査からは，日本人の高い宗教心，信仰心がうかがえると言ってよいのではないか。（同上）

2010 年代に「無宗教」をキーワードとする記事で目立つものは，2000 年代に続き無宗教の国立追悼施設の必要性を論じるものの他，個人の葬儀を無宗教で行うことに関する肯定的な議論である。無宗教式で葬儀を行った人がいるという記事の初出は 1923（大正 12）年の無政府主義者大杉栄についてである（読売　1923.12.17「写真を遺骨にかえて盛んな無宗教葬」）。しばらくは無宗教の葬式は著名人の記事に限られるが，1980 年代から徐々に増え，2000 年代には一般化する。

たとえば 2000 年の朝日に，「死や葬儀について語ることは「縁起でもない」と避けられることが多かったが，少子高齢化時代を迎え，人生の最期を真剣に考える人が増えている」という一文から始まり，兵庫県葬祭事業協同組合連合会が「無宗教式にも対応した自由祭壇プラン」を導入したと紹介している記事がある（朝日　2000.5.11「人生の終幕，自分で演出　準備講座が人気　変わる葬儀事情」）。他方，無宗教葬批判の記事もあり，一例を挙げれば，ルポライター高橋繁行が「また，近年「手づくり葬」が広がっていることに言及したうえで，高橋さんは問題点をこう指摘する。「儀礼の重みをもっと考慮すべきではないか。手づくり葬は無宗教でなければという発想は，考え直した方がいい」」と述べたことへの言及がある（読売　2004.9.11「［宗教はいま］「死と儀礼」　身近な「死者の存続」に必要」）。

これらを経て，2010 年代には，実際に無宗教の葬式を経験したことや，自分は無宗教式を望んでいるという思いを伝える読者投稿が目につく。たとえば，60 代の元会社員男性からの投稿で，勤めていた会社の経営者の葬儀に参列し，「近年，葬儀のやり方について新聞などで論じられています。しかし，いざ自分の問題になると，世間の慣習にとらわれ，従来の形式にこだわった式になりがちです。経営者から最後に最高の贈り物をいただいた思いがしました」という声がある（朝日　2013.4.8「（声）無宗教の葬儀に感じた心遣い」）。

また，80 代の工芸家の女性からの投稿で，自分の葬式はできる限り簡素に，無宗教で行ってほしいという気持ちを伝える次のようなものがある。

ボーナスが出ると息子夫婦が食事に連れて行ってくれる。ごちそうになりながらいつも話題になるのは，近い将来のこととして，私のお葬式をどうするか。

「お母さんの宗教は何なの」と聞かれ，「無宗教」と答える。実のところ仏教もキリスト教も嫌いではないが，心から帰依することもできない。

「質素なお葬式にしてよ」

それだけが願いである。

「家族葬であなたたちと孫が来てくれれば満足」

「無宗教なら式次第はどうすればいいか分からん」

「心配せんでも葬儀社が適当にしてくれるよ」

そんな問答が続くが，息子は納得できないらしい。

「本当はね，お葬式はしないでいいの。2 人でインド観光を兼ねてガンジス川に散骨に行ってきて」と言うと，お嫁さんは理解してくれたようだが，息子はますます困った顔をする。

正直，立派な祭壇を設けてお坊さんの読経と参列者の焼香で終わってウン百万円かかる葬儀はしてほしくない。もし残ったお金があれば何か社会福祉に役立ててもらえればと思う。（毎日　2014.2.4「女の気持ち：私のお葬式」）

新聞読者層の高齢化もあり，近年になればなるほど読者投稿欄は，高齢者が自分の希望の葬儀について語り合う場としても機能している。他方，新聞編集部側の企画では，多様な年齢層の葬儀観を調べる調査を実施したり特集が組まれたりし，その中に無宗教の語が度々現れる（朝日　2018.2.4・2.11「弔いのありかた」，読売　2012.4.7「戒名「必要ない」56% 本社世論調査 冠婚葬祭「簡素に」9 割」）。

日本人無宗教論の日常化を示す展開として，2010 年代にはまた以下のような「無宗教川柳」も登場している。

孫十八車の免許取ると聞き無神論者がお守りを買う（朝日，2012.1.31）
無神論者は驚くばかり（フランスのシャルリー・エブド事件を受けてのもの）
（朝日，2015.1.21）
無神論されど他人を傷つけぬ（読売，2013.2.9）
大安を選る不確かな無神論（読売，2018.11.18）
海外で無宗教とは言えなくて（毎日，2012.4.13）
孫病んで無神論者が手を合わせ（毎日，2012.6.16）
初詣で無神論者の長い列（毎日，2014.1.3）
病室で揺らぎだしてる無神論（毎日，2014.10.04）
行事なら何でも祝う無宗教（毎日，2014.12.12）
祈ることあるでしょ無神論者でも（毎日，2016.5.30）

投稿者は全て違う人物（少なくともペンネーム）だが傾向は類似しており，外国と比べて日本人は無宗教であること，しかしその日本人も困ったときには神頼みをすること，初詣や宗教行事には参加することを自嘲気味におもしろおかしく描き，読者の共感を誘っている。

まとめ

以上の分析から見えてきたことは，何よりも，日本人無宗教論の系譜は近代日本史そのものであるということだ。日本人無宗教論は明治初期から，「宗教」の語が定着する以前から始まり，現在まで連綿と続いてきた。新聞紙上では，どの時代にも，誰かが，「日本人は無宗教だから，〇〇という重要なものが欠けている」と論じていた。時代が変わるとその「〇〇」がコロリと変わり，あるいは反復されるという無宗教論の系譜からは，人は，世間に大いに反省を促したいことがあると，それをその都度「無宗教」のせいにしてきたのだということがわかる。そのような「欠落論」は初期から現在まで見られるが，「日本人は実は無宗教ではなく，独自の宗教をもち，それには良いところもある」論，言ってみれば「独自宗教論」は 1960 年代以降，山本，梅原，山折，阿満等の日本人論的無宗教論の影響下で増加していった。

推移をまとめてみると，明治期，特に初期においては，日本人が無宗教かどうかは，日本人が西洋に比べてどのくらい文明化・進歩しているかの指標だった。キリスト教に匹敵する宗教がなくては日本は野蛮だと軽蔑されるという見方と，宗教などない方が近代化がスムーズであり，無宗教の日本は有利だという見方が拮抗していた。

大正期から昭和初期にかけては，日本人が無宗教かどうかは，国家統合・国力の指標になった。他国と軍事的に対決する上で宗教はある方がよいのかない方がよいのかが議論された。「いつの時代も宗教は政治の道具である」とはよく言われることだが，戦前の日本人無宗教論は政策論議に直結していた。宗教は道徳心の源泉だから，あるいは個人の精神の核となるものだから，良き国民，芯の強い国民を育成し，社会の荒廃を防ぎ国力を増強するには必要だという意見が，学識者，教育者，宗教家等から出された。

戦後の日本人無宗教論は，宗教は戦争に利するかではなく平和に資するかという議論から始まった。「日本人は無宗教だから戦中は残虐行為に走り，戦後も罪悪感なく犯罪を行う」論では，日本人が無宗教かどうかは人間性の指標になっていた。その次には，無宗教かどうかは，戦後に理想として求められた自律的個人の指標になった。自律的個人の形成には，伝統的なイエの宗教を受動的に引き続くのではなく，（西洋のキリスト教徒のように）選択的に信仰をもち，宗教を自分の支柱にすることを推奨する発言が宗教学者の座談会で相次いだ。

1960 年代からは，そういった欠落論に対して「独自宗教論」が徐々に広がっていった。「イエ・ムラの宗教」的な日本の伝統宗教は，信仰やドグマではなく祭儀を中心とする固有の宗教である，それにも倫理はある，自然と共生する汎神論・アニミズムがあるという主張である。「日本人は実は無宗教ではなかった」というこの説は，新聞紙上では，最初はもっぱら識者から出ていたが，1980 年代頃から一般読者の投稿や外国人の発言としても紹介されるようになっていった。

1970 年代からの日本人論・日本文化論は，即座には新聞紙上に大きな変化を起こさなかったことがわかったが，長期的には「独自宗教論」の流れを決定づけた。戦前の日本人無宗教論が政治的視点からのものだったのに対して，この時期は高度経済成長期を反映する経済・社会的視点からのものになった。日本人の言う無宗教とは，日本社会を成り立たせてい

る原理の別名であり，日本教と言うべきものだという説が展開された。

1990 年代以降は独自宗教論が急速に拡大する。またこの時期以降の特徴は，日本人全体が無宗教だというよりも自分自身が無宗教だと示すことがしばしば重要になったことである。その引き金はオウム真理教事件であり，「私は無宗教だ」は「私は普通の人間だ」指標になった。さらに「無宗教」は，「冠婚葬祭は自分式で」指標にもなった。無宗教の葬儀は葬儀の簡略化でもあり，それは「イエ・ムラの宗教」からの脱却を意味するが，戦後の識者が目ざした自律的個人が実際に形成されたからというよりも，しがらみを捨て身軽になりたいという意識が新聞投稿から窺われた。

外国との対比はどの時代も意識されていた。定番は欧米社会のキリスト教徒との比較だが，2000 年代以降はイスラムとの比較が目立つ。新聞であるだけに，イスラモフォビアを煽るというよりも異文化理解を促す論調が多いが，その前提になるのは，ムスリム＝過激派であろうとなかろうと唯一神を強く信仰する人々，日本人＝あいまいな無宗教という，きわめてクリアな二項対立だった。

註

(1) 星野靖二「日本文化論の中の宗教／無宗教」西村明編『隠される宗教，顕れる宗教』国内編Ⅱ（シリーズ　いま宗教に向きあう 2），岩波書店，2018 年，p.187。

(2) 同上，p.193。

(3) 渡辺浩『東アジアの王権と思想　増補新装版』東京大学出版会，2016 年，pp.271-272。

(4) 羽賀祥二『明治維新と宗教』筑摩書房，1994 年，pp.382-384，礫川全次『日本人は本当に無宗教なのか』平凡社新書，2019 年，pp.144-148。

(5) 山崎渾子，山口輝臣，西田みどりが久米のこの論文については論じているが，いずれも日本人無宗教論の系譜という観点からの考察ではない。山崎渾子「久米邦武とキリスト教」大久保利謙編『久米邦武の研究』吉川弘文館，1991 年，p.164。小倉慈司・山口輝臣『天皇の歴史 9　天皇と宗教』講談社学術文庫，2018 年，pp.201-205。西田みどり「久米邦武の宗教観―『米欧回覧実記』を中心に」『大正大學研究紀要 仏教学部・人間学部・文学部・表現学部』第 98 号，2013 年，pp.11-12。

(6) 久米邦武「神道の話」『久米邦武著作集』第 3 巻，吉川弘文館，1990 年（初出は 1908 年），pp.321-322。

(7) 星野，前掲論文，p.188。

(8) 久米美術館編『久米邦武文書』第 3 巻，吉川弘文館，2001 年（執筆は 1871 年），p.13。髙田誠二『久米邦武―史学の眼鏡で浮世の景を―』ミネルヴァ書房，2007 年，pp.141-142。山崎渾子『岩倉使節団における宗教問題』思文閣出版，2006 年，p.206。

(9) 安岡昭男「岩倉使節と宗教問題」中央大学人文科学研究所『近代日本の形成と宗教問題〔改訂版〕』中央大学出版部，1993 年，p.241。京都大学文学部日本史研究室編『田中不二麿関係文書』思文閣出版，2021 年，p.186。

(10) これについての傍証として，久米が 1893 年に著した「史学の独立」に次の一節があ

る。「日本人の宗教心に薄きは，世界の比較上に驚くべき程である。是は神道儒学の論じくづしたる故ならんといふ説あるが，是はさに非ず，全く仏教僧徒の怠りによることです。」久米邦武「史学の独立」『久米邦武著作集』第 3 巻，吉川弘文館，1990 年（初出は 1893 年），p.12。

(11) ただし 2000 年代については分類が未完了である。

(12) α は，「1」として数えた記事の中に連載ものがあることを示す。現在であれば 1 つの記事として 1 回掲載する長さのものを，4～5 つに分割して連日掲載するケースが戦前にはよく見られる。

(13) 星野，前掲論文，p.193。

(14) 全国戦没者追悼式を無宗教で行うことになったという記事は 1963（昭和 38）年に存在（読売 1963.5.14「宗教的儀式ともなわぬ　戦没者追悼式」）。

付録

① 調査の分担

明治時代　木村（雑誌・書籍）　坪井（新聞）
大正・昭和（戦前まで）　坪井
戦後～1950 年代　豊田
1960～70 年代　小村・藤浪
1980～90 年代　野田・守尾
2000 年代　稲村・五十川
2010 年代　坪井
2018～2020 年　和田

② 分類方法

各記事を A～E について分類した。

A　無宗教論（または宗教論）が主題かどうか

※無宗教か宗教かの分類は筆者（記事内）の用法に従う。

1.「日本人は無宗教だ」または「日本人は宗教的だ」が主題である
2.「外国人は無宗教だ」または「外国人は宗教的だ」が主題である
3.「無宗教（その裏返しとしての「宗教的」「信心深さ」）」が主題だが，日本人論とも，外国人論とも関係ない（国民性論に結びつけてはいない）
4.「日本人は無宗教だ」または「日本人は宗教的だ」に言及はあるが，主題ではない
5.「外国人は無宗教だ」または「外国人は宗教的だ」に言及はあるが，主題ではない
6.「無宗教（その裏返しとしての「宗教的」「信心深さ」）」に言及はあるが，日本人論とも，外国人論とも関係ない（国民性論に結びつけてはいない）
7. 1～6 のいずれでもないが，この調査にとって有益な情報が入っている
8. 1～6 に関わるが分類困難である（一つの記事で複数名の異なる無宗教性を扱っているな

ど）

B　「無宗教」という語が使われているかどうか

1.「無宗教」という語が使われている

2.「無宗教」という語を使わずに（例：無神論，宗教嫌い），同じようなことを言っている

3.「無宗教」という語が使われているが，現在とは意味が異なる

C　日本人は無宗教だ

1. 特定の「宗教」のモデルをもとに日本人は無宗教だとしているかどうか

1.1　キリスト教（毎週教会に行くようなクリスチャン）などを宗教のモデルとして，日本人は無宗教だと言っている

1.1.1　無宗教だという指摘で論が終わっている（または 1.1.2 ではない論調）

1.1.2　しかし実際には，キリスト教とは違うタイプの「宗教」を信奉したり行ったりしていると指摘している

1.1.2.1　その「宗教」は自然崇拝（アニミズム）である

1.1.2.2　その「宗教」は初詣や墓参り，祖先崇拝，迷信などの伝統的慣習や信仰である

1.1.2.3　その「宗教」は諸宗教の儀礼や祭りを色々取り入れたものである

1.1.2.4　その「宗教」は天皇崇拝である

1.1.2.5　その「宗教」はスピリチュアル文化である

1.1.2.6　その「宗教」は XX（その他，実体的定義で宗教的なもの）である

1.1.2.7　その「宗教」は YY（「集団主義」「同調圧力」「拝金教」など，実体的定義では宗教ではないもの）である

1.2　特に「宗教」のモデルをもとにすることなく，いきなり「日本人は無宗教だ」と言っている

2. 日本人は無宗教だと言っている人は誰か

2.1　筆者自身（新聞記事の場合は発言者を含む）

2.1.1　筆者は宗教研究者である

2.1.2　宗教家（僧侶など）

2.1.3　文系の研究者

2.1.4　文筆家

2.1.5　ジャーナリスト（新聞の記者を含む）

2.1.6　その他（筆者の職業が不明な場合を含む）

2.2　日本人一般　（＝「日本人はよく「日本人は無宗教だ」と言う」，と筆者が引用している）

2.3　特定の日本人や日本人集団

2.4　外国人

2.5　その他

3. 無宗教である日本人は
3.1　日本人全員（「日本社会全体的に」も含む）
3.2　特定の社会階級
3.2.1　民衆
3.2.2　下層階級・労働者階級
3.2.3　中産階級
3.2.4　知識人
3.2.5　上流階級
3.3　特定の地域
3.3.1　13 大市
3.3.2　その他の市
3.3.3　町村
3.3.4　その他
3.4　特定の時代
3.4.1　明治以前（近代以前）
3.4.2　明治～第二次世界大戦
3.4.3　戦後～高度経済成長期（1970 年代前半まで）
3.4.4　1970 年代後半～現在
3.5　特定の世代
3.5.1　若者
3.5.2　高齢者
3.5.3　それ以外
3.6　ジェンダー
3.6.1　女性
3.6.2　男性
3.6.3　それら以外でジェンダーに特に言及している
3.7　特定の日本人（例えばインタヴューを受けている人が「私は無宗教です」と言っている）

4.「無宗教な日本人」を変えようとしているかどうか
4.1　宗教的になるべきだと論じている
4.1.1　宗教家に，アクションを促しているか（宗教的な日本人を増やすようにとりくむべき）
4.1.2　宗教家には特にメッセージはない
4.2　無宗教のままでよいと論じている
4.3　（もっと）無宗教になれと論じている（儀礼だけは仏教式や神道式でやっている人たちに，無宗教式でやったらどうか，あるいは儀礼を廃止したらどうかと言っているケース含む）
4.4　特に「こうあるべき」という主張はない

5. 無宗教になった原因
5.1　日本のお国柄，日本人の民族性
5.2　近代化（世俗化）の結果
5.3　西洋人を鏡にして自分たちを見るから
5.4　その他（5.1～5.3 以外の原因，または原因について特に言及がない）

6.「外国で「私は無宗教だ」と言うのはよくない」という論があるかどうか
6.1　ある
6.2　ない

D　日本人は宗教的だ
1. C への反論として論じているかどうか
1.1　C への反論として論じているが，C の 1.1.2 とは異なる論
1.2　C への反論ではなく，論じている
1.2.1　好意的か否定的か
1.2.1.1　宗教的であることをポジティブにとらえている
1.2.1.2　宗教的であることをネガティブにとらえている
1.2.1.3　どちらでもない
1.2.2　どのような意味で「宗教的」か
1.2.2.1　神道や仏教を信奉している，新宗教の信者が多い，など
1.2.2.2　その「宗教」は自然崇拝である
1.2.2.3　その「宗教」は初詣や墓参り，祖先崇拝，迷信などの伝統的慣習や信仰である
1.2.2.4　その「宗教」は諸宗教の儀礼や祭りを色々取り入れたものである
1.2.2.5　その「宗教」は天皇崇拝である
1.2.2.6　その「宗教」はスピリチュアル文化である
1.2.2.7　その「宗教」は XX（その他，実体的定義で宗教的なもの）である
1.2.2.8　その「宗教」は YY（「集団主義」「同調圧力」「拝金教」など，実体的定義では宗教ではないもの）である

2.　宗教的である日本人は
2.1　日本人全員
2.2　特定の社会階級
2.2.1　民衆
2.2.2　下層階級・労働者階級
2.2.3　中産階級
2.2.4　知識人
2.2.5　上流階級
2.3　特定の地域

2.3.1　13 大市
2.3.2　その他の市
2.3.3　町村
2.3.4　その他
2.4　特定の時代
2.4.1　明治以前（近代以前）
2.4.2　明治～第二次世界大戦
2.4.3　戦後～高度経済成長期（1970 年代前半まで）
2.4.4　1970 年代後半～現在
2.5　特定の世代
2.5.1　若者
2.5.2　高齢者
2.5.3　それ以外
2.6　ジェンダー
2.6.1　女性
2.6.2　男性
2.6.3　それら以外でジェンダーに特に言及している

3.「宗教的な日本人」を変えようとしているかどうか
3.1　無宗教になるべきだと論じている
3.2　宗教的なままでよいと論じている
3.3　特に「こうあるべき」という主張はない

4. 宗教的になった原因
4.1　昔からそうだ
4.2　布教によりそうなった
4.3　政治的影響
4.4　時代の変化
4.5　その他の原因をあげている
4.6　特に原因を論じていない

E　外国人は無宗教的だ
1. 日本人との比較があるか
1.1　日本人は宗教的だが外国人は無宗教だ
1.2　日本人は無宗教で，外国人も無宗教だ
1.3　日本人は無宗教だが，外国人はもっと無宗教だ
1.4　日本人との比較は特にない
1.5　日本人は無宗教で，外国人は宗教的だ